

BELIEVER'S
BIBLE
COMMENTARY

新約聖書注解2

使徒→ピリピ

ウィリアム・マクドナルド [著]

アーサー・ファースタッド [編]

NEW TESTAMENT

vol.2

Acts→Philippians

WILLIAM MACDONALD
Contributions by Arthur Farstad

新約聖書注解 2

使徒 → ピリピ

ウィリアム・マクドナルド著

アーサー・ファースタッド編

伝道出版社

Believer's
BIBLE
COMMENTARY

WILLIAM MACDONALD
EDITED BY ART FARSTAD

PUBLISHERS
THOMAS NELSON
NASHVILLE • ATLANTA • LONDON • VANCOUVER

EVANGELICAL PUBLISHERS
TOKYO, JAPAN

目次

著者による序文	5
編集者による序文	6
使徒の働き.....	9
「使徒の働き」に出てくる祈り.....	18
家の教会と組織教会.....	30
クリスチャンと国家	45
信者のバプテスマについて	56
「平信徒」の働き.....	58
伝道の戦略	82
地域集会の独立	88
神の導き.....	91
奇跡	93
因習にとらわれない説教壇	100
「使徒の働き」のメッセージ.....	136
ローマ人への手紙	145
福音を聞いたことのない異教徒たち.....	155
罪について	166
神の主権と人間の責任	208
コリント人への手紙 第1	251
コリント人への手紙 第2	355
ガラテヤ人への手紙	437
律法主義	476
エペソ人への手紙	481
神の選び.....	488
ピリピ人への手紙	559

著者による序文

この注解書は、普通のクリスチャンが聖書を本格的に学びたいときに役立つことでしよう。けれども、どんな注解書でも聖書に取って代わることはできません。注解書にできることと言えば、おおよその意味をわかりやすく説明し、読者がさらに聖書を学ぶように仕向けることだけです。

この注解書には、むずかしいことばや専門用語は用いていません。学術的、神学的なものではありません。たいていの信者は聖書の原語に通じてはいませんが、みことばから実際的な利益や恩恵を受けることは、だれにでも可能なのです。聖書を組織的、系統的に学ぶことによって、どんなクリスチャンでも「真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人」(Ⅱテモテ 2:15)になれると確信しています。

それぞれの注解は短く簡潔で、しかも要を得ています。ある箇所に関して助けを得るために、読者が、何ページにもわたる説明を我慢して読み通す必要はありません。今日のようにだれもが忙しい状況では、真理ができるかぎり要約されたかたちで伝えられなければならないのです。

むずかしい箇所にも注釈を加えています。多くの場合、いくつかの解釈を記すことによって、どの解釈がその文脈(そして聖書全体)に照らして最もふさわしいか、その判断を読者にゆだねています。

聖書知識だけでは十分ではありません。みことばを実際の生活に適用しなければなりません。そのため、この注解書では、神の民がみことばを生活の中に生かすことができるということを示そうと努めています。

もし本書が最終目標になってしまうなら、本書を用いることは(助けではなく)わなになってしまいます。もし本書が用いられることによって、聖書を学ぶことへの興味がいつそう刺激され、主の教えに従おうとするなら、本書はその目的を達したことになります。

みことばをとおして神を知るといのは、すばらしいことです。どうか聖霊が読者を教え、導いてくださいますように。

編集者による序文

「注解書を軽んじてはならない」。1950年代末期のエマオ聖書学校(現在は大学)の授業で、ある教師がこのように助言してくれました。少なくとも一人の学生が、その後もずっと、そのことばを覚えていました。その教師とは、この注解書の著者であるウィリアム・マクドナルド氏。その学生とは、編集者である私アーサー・ファースタッド(当時は青二才の新入生)でした。彼はそれまで、エペソ人への手紙に関するH・A・アイアンサイドの注解書しか読んだことがありませんでした。まだ10代の頃の夏に、毎晩その注解書を読み、アーサー・ファースタッドは注解書というものが何であるかを知ったのです。

注解書とは

注解書とは正確には何であり、なぜ私たちはそれを軽んじてはならないのでしょうか。最近、ある有名なキリスト教出版社は聖書関連書籍を15種類に分けました。注解書がほかの学びの本とどう違うのか(あるいは、聖書地図、聖書辞典、聖書語句辞典とどう違うのかといったことまで含めて)正確には知らない人がいたとしても、少しも驚くべきことではありません。

「注解」とは、本文の語句や文章の意味を、一節ごとに、あるいは段落ごとに解き明かすという意味です。あるクリスチャンたちは注解書を一笑に付し、「私が聞きたいのは自分に語られるみことばだけだ。だから聖書そのものを読む」と言われます。信心深く聞こえますが、そうではありません。注解書とは、(最も難解な部分も含めて)聖書の教えが詳細かつ明確に解説されたものが、単に活字になっているだけのものです。注解書の中には(アイアンサイドのもののように)、公の場で学ばれたことを、そのまま活字にしたようなものもあります。そのうえ、英語であれば、あらゆる時代、あらゆる言語のすぐれた注解書を手に入れることができます。あいにく、多くのものはあまりにも古く、時代遅れで、また、あまりにも難解なため、普通のクリスチャンは(閉口してしまう、とは言えないまでも)落胆してしまいます。ですから、普通の信者のために書かれた、わかりやすい注解書が必要なのです。

注解書の種類

理論的には、聖書に興味がある人ならだれでも注解書を書くことができます。そのため、極端に自由主義的なものから非常に保守的なものまで、様々な考え方のものがあります。この注解書は、聖書を「信仰と実践のために全く十分な、神の靈感による完全な神のみことば」として受け入れている点からも、非常に保守的なものと言えます。

注解書といっても、(たとえば、ギリシャ語、ヘブル語の構文について詳しく説明して

あるような)高度に専門的なものから、概略しか書かれていない、あまり内容のないものまで様々です。本書はその間のいずれかに位置しています。専門的な事柄はおもに巻末の「後注」に記されていますが、本文にも、難解な箇所や心に迫る適用を避けることなく記されています。マクドナルド氏による本書は、詳細かつ明確な説明に富んでいます。その目的は、(ありふれたクリスチャン、最低水準で満足している今日の平均的なクリスチャンではなく)弟子を生み出すことを助けることです。

注解書はその著者の神学的な立場によっても変わってきます。保守的か自由主義的か、プロテスタントかローマ・カトリックか、千年王国前再臨説か無千年王国主義か。この注解書は保守的な立場であり、プロテスタントであり、千年王国前再臨説に基づいています。

本書をどのように用いるか

この本の使用方法はいくつかあります。

- ① もし読者が聖書を愛しておられるなら、この本のページをばらばらめくってあちらこちらを拾い読みされるだけでも、本書の内容を味わい、楽しむことができるでしょう。
- ② 読者は、ある一節(あるいは段落)に関して疑問を持っておられるかもしれません。文脈にも考慮しながら調べてみてください。きっと良い手がかりを見いだされることでしょう。
- ③ もし読者が特定の教理、たとえば安息日、バプテスマ、選び、三位一体といったテーマについて学んでおられるなら、そのことを扱っている箇所を調べるとよいでしょう。目次を参照くだされば、どのようなテーマが特に解説されているかがわかります。本書で取り上げていない主題に関しては、聖書語句辞典を用いることによって、聖書のどこでその問題が扱われているかを見いだしてください。
- ④ 読者が属しておられる集会(教会)の学び会、聖書研究会、日曜学校などで、新約聖書を順番に学んでおられるかもしれません。該当箇所を前もって読んでおけば、大いに役立つことでしょう(ほかの人たちも本書を用いていることがわかれば、あなたはほかの注解書も欲しくなるかもしれません)。
- ⑤ 最終的には、どのクリスチャンも聖書全体を読み通すべきです。どの書巻にも難解な箇所があるので、本書のように詳細かつ保守的な本を用いることによって、あなたの学びの質や能力は大いに高められることでしょう。

聖書研究は最初のうちは退屈に思えるかもしれませんが、学びを進めて行くに連れて、たいへん味わい深いものとなります。

マクドナルド氏のかつての助言は、「注解書を軽んじてはならない」でした。英語新欽定訳に基づいて本書を編集させていただいた私は、この注解書を大変注意深く読み終えた者として、さらに一歩進んだ助言を差し上げることができます。「どうぞ、この学びを楽しみ、味わってください」と。

使徒の働き

序 論

「キリストが主題であり、教会が手段であり、聖霊が力である」。

W・グレアム・スクロギー

1. 正典における独自性

「使徒の働き」は、“神の靈感によって書かれた”唯一の教会史である。また、“最初の”教会史であり、最も初期の時代を扱った唯一の教会史である。ほかの教会史は、いずれも、ルカの業績にわずかな伝承(と多くの憶測)をつけ加えたものにすぎない。この書物がなかったら、私たちは全く途方に暮れていたことだろう。福音書から使徒たちの手紙へと一気に進んだとしたら、話が飛躍しすぎるからである。どのような人々がキリスト者と呼ばれ、なぜそう呼ばれるようになったのか。使徒の働きは、このような多くの問いに答えている。そして、使徒の働きは、「キリストの生涯」と「(新約の書簡で教えられている)キリストのいのち」を結ぶ懸け橋である。そればかりか、ユダヤ教からキリスト信仰へ、律法から恵みへの(過渡期にあたる)つぎ目ともなっている。使徒の働きの解釈がむずかしいのは、このような理由にもよる。また、地平線が徐々に広がっていくかのように、

エルサレムを拠点にしたユダヤ人たちの小さな活動に始まり、ローマ帝国の首都に攻め入った世界的な信仰に至るからである。

2. 筆者問題

ルカの福音書と使徒の働きの著者は同一人物である。もし第3福音書がルカによるものであるなら、使徒の働きもそうであり、その逆の言い方も成り立つ(「ルカの福音書」の序論を参照)。

ルカが使徒の働きを書いたという「外的証拠」は、古くからあり、有力なもので、広く認められている。「ルカの福音書の反マルキオン序文」(160-180年頃)、「ムラトリ断片」(170-200年頃)、それに初期の教父たち(イレナエウス、アレクサンドリアのクレメンス、テルトゥリアヌス、オリゲネス)は、ルカが著者であることに同意している。さらに後の時代の者たちの意見もほとんど一致しており、その中には、エウセビオスやヒエロニムスといった権威者たちも含まれている。

ルカが著者であるという「内的証拠」は3つある。著者は、使徒の働きの冒頭で、「前の書」に特に言及している。この「前の書」もテオピロに献上されたものであり、ルカ1:1-4から、第3福音書が「前の書」であることがわかる。その文体、同情的な見方や考え方、語彙、弁証的な強調表現、そして多くの細かな点が、この二つの書物を結びつけている。もしルカの福音書を他の3つの福音書といっしょにしようという願いがなかったならば、この二つは、IコリントとIIコリントのように、前後に並んでいたに違いない。

次に、著者がパウロの旅に同行したことは、使徒の働きの本文から明らかである。「私たち」という有名なことばが出てくる箇所があり、著者が実際にその場に居合わせた人物であることがわかる(16:10-17, 20:5-21:18, 27:1-28:16)。これを“作り話”の手法として懐疑的に説明しようとする者たちもいるが、その意見は説得力に欠けている。さらに本物らしくするためにつけ加えられたものにすぎないなら、なぜこれほど“少なく”、また“目立たぬ”ように用いられているのか。そして、「私たち」に含まれるはずの「私」の名前が、なぜ記されていないのか。

最後に、(著者が三人称で挙げている)パウロの他の同行者たち、および(「私たち」が出てくる箇所)その期間はパウロのそばにいなかった者たちを除外すると、ルカの名前だけが残る。

3. 執筆年代

新約の書巻の中には、執筆年代があまり重要でないものもいくつかあるが、使徒の働きの場合は重要である。この書が教会史であり、しかも最初の教会史だからである。

使徒の働きに関しては、次の3つの年代が主張されている。そのうちの二つはルカが著者であることを認めているが、もう一つはそれを否定している。

1. 執筆年代を2世紀とするもの。この場合、ルカが著者であることは、もちろんあり得ない。ルカが、紀元80年、あるいは85年以降まで生き延びたとは考えられない。ある(自由主義の)学者たちは、著者がヨセフスの「ユダヤ古代史」(紀元93年頃)を参考にしたと考えているが、彼らが「チウダ」(使徒5:36)に関して主張する記事は、内容が一致せず、他の出来事についても類似点は少ない。

2. 一般的な見解で、ルカが、70年から80年の間に、ルカの福音書と使徒の働きを書いたというもの。この場合は、ルカがマルコの福音書(おそらく60年代以降)を参考にした可能性もある。

3. 非常に有力な見解で、この書の出来事が終わる直後、すなわち、パウロがローマで最初に投獄された時期に、ルカが使徒の働きを完成したとするもの。

ルカは三巻目の執筆を計画していたかもしれない(しかし、それは神のみこころではなかったようである)。それで彼は、紀元63年から70年の(クリスチャンたちが被った)破壊的な出来事に言及しなかったのかもしれない。けれども、ローマ炎上後のイタリアにおけるネロの残忍な迫害(64年)、ユダヤ人たちがローマと戦ったこと(66-70年)、ペテロとパウロの殉教(60年代後半)、そして、ユダヤ人とヘブル人クリスチャンにとって最も衝撃的な出来事であったエルサレム陥落などが省かれていることから、執筆年代がそれ以前であったことがわかる。したがって、ルカが使徒の働きを書いたのは、パウロがローマで投獄されていた紀元62年、もしくは63年頃であ

る可能性が最も高い。

4. 背景と主題

「使徒の働き」はいのちと躍動感に満ちている。私たちはそこに、聖霊のみわざ、教会の形成、教会の権限、そしてその拡大を見いだす。それは、最もふさわしくない器を用いて、最も手ごわい障害に打ち勝ち、最も型破りな方法を用いて、最も顕著な業績を上げた、主権ある聖霊の壮大な記録である。

使徒の働きは、福音書が終わったところから物語を再開しており、テンポの早い劇的な描写によって、(教会が揺籃(ようらん)期にあった)初期の動乱の時代に私たちを運んでくれる。これは、偉大な過渡期の記録である。その当時、新約の教会は、ユダヤ教という死に装束を脱ぎ捨てようとしていた。そして、(ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つとなる)新しい交わりという、その特有の性質を示していた。

神が働いておられるのを読むと、霊的な感情が高揚するのを感じるものである。同時に、罪とサタンが反抗し妨害する際に生じる緊張感を覚える。

最初の12章は、使徒ペテロが重要な役割を演じている。彼はイスラエルの民に勇ましく伝道している。13章からは、使徒パウロが最前線に立っている。彼は、神の靈感を受けた、疲れを知らない、熱心な「異邦人への使徒」として描かれている。

使徒の働きは約33年の期間にわたっている。J・B・フィリップスは次のように指摘している。「人類の歴史において、これに匹敵する期間は、ほかにはない。普通の人々から成る小さな群れが、これほど世界を動かしたのである。そのため、彼らの敵どもは、怒りゆえの涙を目に浮かべなが

ら、使徒たちのことを『世界中を騒がせて来た者たち』と言ったのである。¹

アウトライン

1. エルサレムの集会 (1-7 章)
 - (1) 復活の主による聖霊降臨の約束 (1:1-5)
 - (2) 昇天なさる主、使徒たちに権限を与える (1:6-11)
 - (3) エルサレムで待機して祈る弟子たち (1:12-26)
 - (4) 五旬節の日 — 教会の誕生 (2:1-47)
 - (5) 足のなえた男のいやしとイスラエルに対するペテロの非難 (3:1-26)
 - (6) 迫害と教会の成長 (4:1-7:60)
2. ユダヤおよびサマリヤにおける教会 (8:1-9:31)
 - (1) サマリヤでのピリポの働き (8:1-25)
 - (2) ピリポとエチオピアの宦官 (8:26-40)
 - (3) タルソのサウロの回心 (9:1-31)
3. 教会、地の果てにまで (9:32-28:31)
 - (1) ペテロによる異邦人への福音伝道 (9:32-11:18)
 - (2) アンテオケに集会が設立される (11:19-30)
 - (3) ヘロデによる迫害および彼の死 (12:1-23)
 - (4) パウロの第1次伝道旅行:ガラテヤ (12:24-14:28)
 - (5) エルサレム会議 (15:1-35)
 - (6) パウロの第2次伝道旅行:小アジアとギリシャ (15:36-18:22)
 - (7) パウロの第3次伝道旅行:小アジアとギリシャ (18:23-21:26)
 - (8) パウロの逮捕と裁判 (21:27-26:32)